

戦火に消えた

## 幻の札幌オリンピック

今から六十五年前に札幌で開かれるはずが、ついに日の目を見なかった『悲運のオリンピック』をご紹介します。

昭和十一年、ベルリンで開かれた国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）の総会で、十五年に行われる第十二回夏季オリンピックの開催地に東京が選ばれました。当時のオリンピック憲章では、夏季大会の開催に冬季大会開催の優先権を認めていました。このため、国内で第一候補地に決まっていた札幌が、冬季大会の開催地になるはずでした。しかし、期待を裏切り、決定は翌年の総会に持ち越されてしまったのです。

その原因は、アマチュア規定を巡るＩＯＣと国際スキー連盟の確執にありました。この問題が解決するまで冬季大会の開催決定が先送りされたのです。さらに、十二年の総会でも、札幌の開催能力を疑問視する声が出たり、ノルウエーとの競合があったり、

曲折した末、「準備状況を見たうえで」という条件がつけられ、確定には至らなかったのです。それでも、一応の見通しは立ったというところで、当時の新聞は、「三年後は雪の聖戦場、堂々『世界の札幌だ』」と誇らしげな見出しで札幌開催決定を大々的に伝えました。さらに、街の至る所に張り出された特報版には黒山の人だかりができ、商店街では開催決定を祝う看板や五輪をかたどった装飾で喜びを表したといっています。

その後、屋外リンクが中島公園に建設されることになり、郊外の神社山付近でボブスレーコース予定地の測量が行われるなど、準備作業は着々と進みました。また、国際無線電話の整備やテレビ放送の研究など、札幌が国際都市として大会を迎えられるようさまざまな計画が立てられました。

一方、商工会議所が各国選手の人数や宿泊施設の調査に乗り出し、外国人の生活に欠かせない肉製品や乳製品を扱う酪農家たちが、チーズ工場や食肉工場の増設に取り掛かるなど、市民の間でもオリンピック熱はますます高まってきました。こうした人々の思いにこたえるかのように、十三年三月には、

やっとな札幌開催が正式決定されたのです。

しかし、緊迫の度合いを増す国際情勢が、人々の希望をくじくこととなります。十二年に始まった日中戦争が激化の一途をたどる中、十三年七月、正式決定からわずか四カ月余りで、東京大会ともども返上されてしまったのです。



札幌での冬季大会のために作られたポスター。  
結局、札幌では五輪旗が掲げられることはなかった  
(札幌市教育委員会文化資料室所蔵)

その後、四十七（一九七二）年に第十一回冬季大会が札幌で行われ、ついに悲願がかないますが、それまでに三十四年もの歳月を待たなければいけませんでした。

（平成十四年二月号・第八十二回）